

館山支部だより Vol.109

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



樹齢20年を迎えた河津桜
<3月中旬 拙宅の庭先に>

新年度を迎えますが、団体にとって年度の切り替えは事業活動のけじめを付ける上で大事な節目と言えましょう。この2年間「コロナ禍、感染拡大防止」の配慮から、事業活動の実績が上がらなかったことは否めません。この度まん延防止重点措置は解除されましたが、感染拡大の心配が無くなったわけでもありません。このことを念頭に置きつつ今までの活動を見直し、少しでも逆境に見合った活動の方策を見出すことも必要と考えておりますので、会員諸兄の一層のご理解ご協力をお願い致します。 <館山支部長>

支部の活動概要

《2・3月活動実績》

- 3. 3(木) 県隊友会後期支部長会議(千葉市民会館)
- 3.21(火) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮、コロナの感染状況に鑑み関係者のみで実施)
- 3.26(土) 年度末支部役員会(コミセン)

《4・5月活動予定》

- 4. 13(水) 4年度県隊友会通常総会(千葉市生涯学習センター)
- 5.21(土) 支部総会(館空会との合同行事、コミセン)
- 5.27(金) 落下傘部隊戦没者慰霊祭(安房神社)
- 5.28(土) 支部役員会(コミセン)

令和4年度支部総会等行事のお知らせ 5/21(土) コミセン

恒例の館空会・隊友会館山支部合同の総会等行事の時節になりました。両会にとって年1回多くの会員が一堂に会して相互に交流を深め合い、今後とも房総で長い人生を送る上で新しい触れ合いを見出す好機でもあります。新しく入会された方々をはじめ一人でも多くの皆さんの参加をお待ちしております。

惜しむらくは、3年目に入ったコロナ禍が蔓延防止重点措置が解除されたとはいえ、依然として感染が続いている状況に鑑み、皆さんが楽しみにしている「懇親会」については、大事を取って取り止めることにしましたのでご了承ください。

代わりに「近況報告会」として、参加の皆さんによるスピーチの場を設けましたので、2～3分の持ち時間を近況なり経験談など存分に自己アピールしてみたいかがですか。 <支部事務局>

災害復興支援ボランティア要員の募集について

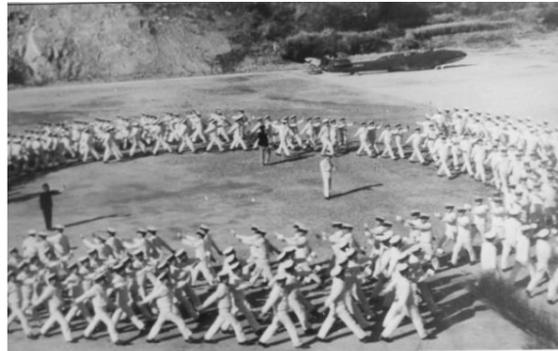
平成23年の東日本大震災を機に県隊友会が立上げた災害復興支援ボランティアチームで、実動として東日本を初め旭市や常総豪雨災害復興支援協力があり、関係方面から統制のとれた組織的な活動ぶりを高く評価されております。

現在、県のチーム要員として56名が登録(うち館山支部1名)されておりますが、高齢化等に伴い交代要員の補充の必要に迫られております。皆さんの積極的な申出をお待ちしております。 <応募条件> 年齢不問、年齢相応の健康体で一週間程度の”中作業”に耐えられる自信のある会員 細部については支部事務局にお問い合わせ下さい。 <<支部事務局 TEL22-0230 川村>>

《総会行事スケジュール》
期 日:5月21日(土) 10:00~12:30
場 所:コミュニティセンター第2集会室

《行事時程表》
9:40~ 受付開始
10:00~10:30 館山支部総会
10:40~11:10 館空会総会
11:15~12:30 近況報告会

※ 出欠返信期限:4月20(水)までに投函
なお館空会に所属する会員は、館空会から出される案内状に基づいて出欠の返信をして下さい。 <支部事務局>



<練兵場での軍歌演習>
州ノ空7期兵器整備予備学生
のアルバムより、S19年初め

私感「ロシアのウクライナ軍事侵攻・歴史に見る数々の暴挙」

ロシアの武力侵攻により激しい交戦状態が続くウクライナ情勢が、停戦交渉も平行線をたどったまま1か月が経過しております(24日時点)。この間、軍事基地だけでなく市街地や民間施設等に対する非情な空爆、ミサイル攻撃等が容赦なく続けられているのです。ロシアにとって一番の懸念は、ウクライナがNATOへの加盟を表明していることでしょう。プーチン大統領がしきりに強調している「1インチたりとも東へ(西欧の拡大を)許さない」には、帝政時代から領土・勢力の拡大を国策としてきたロシアの「南下政策」が背景にあると思うのです。かつてヨーロッパの火薬庫と呼ばれ、第一次世界大戦の導火線になったバルカン半島問題にもロシアの南下政策が大きく絡んでいたのです。今後の成り行きが大いに気懸かりなところですが、ロシアの南下政策は欧州だけでなく、かつては極東にも向けられていたのです。

日本を脅かしたロシアの南下政策・日露の衝突

- 1894(明治27)~95年の日清戦争で日本に敗れた清国は、台湾と遼東半島を日本に割譲(下関条約)。これにロシアがドイツとオランダを巻き込んで猛反発し、日本はこれを呑んで遼東半島を返還したことがありました(三国干渉事件)。ところがその舌の根も乾かぬうち、ロシアは清国に圧力をかけて遼東半島を租借(実質的には占領)し、旅順に太平洋艦隊の根拠地(港湾)と難攻不落の要塞を構築したのです。これが後の日露戦争の火種になったと言ってもよいでしょう。
- 1900(明治33)年、清国の「義和団の乱」に乗じて帝政ロシアが一方向的に満州に侵攻し、全土を占領下に置くとともに朝鮮半島にも触手を伸ばし、利権の拡大に乗り出したのです。満蒙(満州、モンゴル)と朝鮮を国家防衛の生命線とし資源確保の宝庫とする日本にとって最大の脅威であり、ついに国交断絶から日露戦争(1904~05)へと発展することになったのです。日露戦争に勝利した日本は、ロシアから韓国における権益と樺太(現在のサハリン)の南半分を割譲されたのです。

終戦直前に始まった”日ソ戦”とソ連の暴挙

- 大東亜戦争では交戦国でなかったソ連が、終戦直前に突如中立条約を破棄して優勢な大部隊を満蒙・朝鮮に侵攻させ、すでに刀折れ矢尽きた日本軍に猛攻撃を加え、破竹の勢いで樺太、千島列島、ついには日本の固有領土の北方四島を占領するに至ったのです。この一方的な攻撃は、日本がポツダム宣言を受諾して即時停戦命令を発した終戦をも無視し、戦艦ミズリ号上で行われた降伏調印式の前日(9月2日)まで続けられたのです。北海道への侵攻直前のことであり、「北方五島」問題に発展することがなかったことを不幸中の幸いとすべきなのでしょうか。話はこれだけで終わらないのです。
- 終戦後、満州や朝鮮に取り残された日本軍兵士や満蒙開拓団の残留邦人等を、ソ連が容赦なく貨車に乗せてシベリア各地(強制収容所)に送り込み、過酷な労働を強いた抑留問題なのです。日本側の調査では50万7千人が抑留され、1割近い5万5千人が病氣、栄養失調等で故国の土を踏むことなくシベリア凍土に眠ることになったことは痛恨の極みです。エリツイン大統領が「非人道的な行為」として謝罪の意を表したにもかかわらず、ロシア政府は「抑留」とせず「戦時捕虜」として扱ってきたのです。日露戦争のリベンジを思わせる出来事でした。最近の国後・択捉の軍事基地の強化や津軽海峡を我が物顔に通過するロシア艦隊の動きを見るにつけ、不気味なものを感じてならないのです。 <<川村 巖 会員、海、館山支部長>>

戦時のハイテク・マンパワー集団・州ノ埼海軍航空隊

二十年前に建てた拙宅が、かつての州ノ埼海軍航空隊の練兵場(グラウンド)の一隅にあることを後になって知った。奇遇であり、毎日この場で課業整列や総員集合、時には教練、分隊対抗の棒倒しなど、修練、エネルギー発散の場として若人たちの熱気、意気込みが伝わってくるようである。ところで州ノ埼航空隊(「州ノ空」)と言っても航空隊ではなく学校である。海軍の航空部門は学校を設けなかった。と言うよりは学校と呼ばず航空隊と呼んだ。従って学校長は航空隊司令、部長クラスは隊長である。航空兵器技術の飛躍的な進歩に対応する兵器整備員養成のニーズに応えるため、戦争半ばの昭和18年6月、館山航空基地と県道を挟んだこの場所に開校した。射爆、無線、光学、偵察写真の術科教育を行う、海上自衛隊で言えば第三術科学校の教育2部・3部に相当する教育機関であり、最盛期には1万数千人を擁するハイテク・マンパワー集団であった。航空兵器整備ハイテク要員の急速養成という使命を帯びて開隊された州ノ空であったが、戦局は「教育に専念」することを許さず、彼らのマンパワーは思いもかけぬ築城作業等へと振り向けられることになった。

築城建築推進の原動力

昭和19年に入り、次第に現実味を帯びてきた米軍による空襲に備え、海軍は各部隊に築城施設(地下壕、航空機用掩体壕など)の建設を指令した。いち早く建設に着手した州ノ空は、3万人を収容できる兵員用防空壕と四階層構造の戦闘指揮所壕を、昼夜交代の突貫作業により19年末までに他部隊に先駆けて余裕をもって完成させ、築城建設の模範(モデル)として全部隊に文書で布告されたことについては以前紹介したことがある。これらの作業の原動力になったのが19年半ば入校した2,000名余の予科練習生(「予科練」)であった。

部隊(学校)を挙げた疎開作戦と本土決戦準備の支援

昭和20年2月16~17日、二日間にわたって館山航空基地は米機動部隊の艦載機による反復空襲に見舞われた。硫黄島上陸(2.19)の前哨戦として行われた関東各地の飛行場に対する艦載機による初めての攻撃であった。この空襲を機に州ノ空はいち早く疎開を決断した。激化が予想される空襲による教育の中断を避けるためであった。

直ちに疎開先適地の選定と同時に兵舎や講堂の解体が始められ、疎開先が決まるや解体材の運搬、そして疎開先の講堂等の建築作業が始められ、近隣から大工経験者も集められ4か月余に及ぶ全校挙げた疎開大作戦が展開された。記録によれば疎開先は南条に本部を置き、富浦、船形など数か所に各隊単位で分散している。6月末には疎開先の建物も完成し、教育を始めたと言われる。

疎開作業の最中、本土決戦に向けた築城施設(海上、水中、航空特攻用の地下壕など)の建設に拍車がかげられた。房総一帯には多くの決戦用の築城施設が計画され、州ノ空は疎開作業に加えてこれらの施設の建設支援にも駆り出されることになった。支援の全体像は分からないが、横須賀警備隊の戦時日誌(20.6)には「測的監視壕の工事終了、州ノ空から引き渡しを受ける」という記事がある。お手伝いといったハンパなものだけでなく、建設工事そのものを「請け負った」と言った方が適当であろう。

本業(教育)を捨てて築城作業に全力を投入した感があるが、空襲下での防空壕の中での教育方策や疎開先での教育環境の改善等についての懸命な取り組みも行われていたことを付記しておきたい。 <<自称地域史探索マニア その34>>